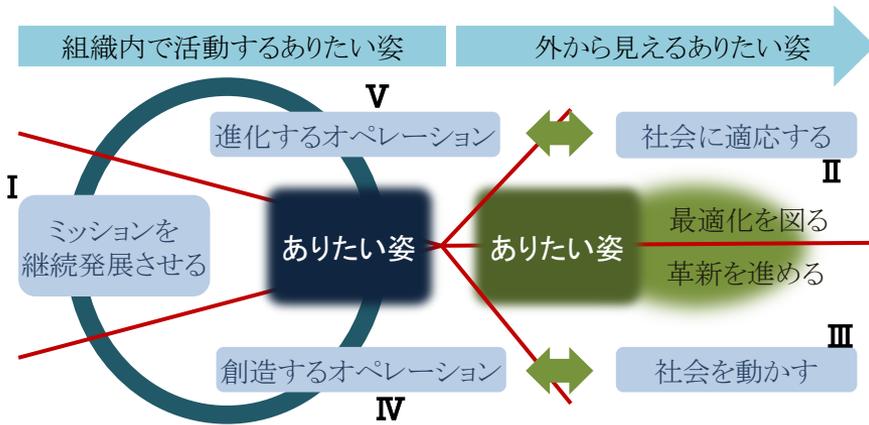


理想から始める



明日は、誰にも分からない。推測をしても、推測が確実であるとは言えない。だから、理想から始めるしかない。

組織の理想状態

如何なる組織も、社会で必要とされている機能を十分に果たすことを目的とする。社会を進歩させ、発展させる。社会の問題を解決し、同じ問題が起こらないようにする。企業も同じである。

企業は、自らの資産を活用し、社会機能を果たす。自らの力で、社会機能を果たすために、最小のコストで最大の利益を必要とする。同時に機会を発見し、次の事業に向けての開発を行う。

企業は、社会での機能を果たさない限り、存続できない。

企業は成長、発展するために、変化を糧にする。社会に変革をおこし、市場でのリーダーシップを獲得する方向へと進む。

これらを実行させるために、理想とする活動するありたい姿がある。一般にありたい姿は一つにまとめられている。ここでは行動する方向及び対象として5つに分類した。

5つのありたい姿

第一は、ミッションを継続発展させるありたい姿である。ミッションは変わらない。もし、変わらざるを得ないのであれば、組織は新たなミッションに応じて再編しなければならなくなる。ミッションの効率をあげ、活動の伝承、継続をしなければならない。

第二は、社会に適応する姿である。最適化を常に図る。商品特性、

商品用途、流通、生産性等々とそれらの機能について徹底した分析をする必要がある。「社会に適応する」では二つの姿勢が必要になる。今日の維持のための最大成果をあげるのが第一にくる。もう一つ、現在の活動の範囲で、まだ見いだされていない事業機会を探さず。現在の事業の最大化である。

第三は、「社会を動かす」であるが、革新を図るである。新たな事業機会を新たな商品群、機能を持って、社会機能を提案する。または仕掛けるである。一つの事業がおなじ形態で継続するはずがない。社会は常に変化している。その変化を機会にしての活動である。

第四と五は、オペレーションに関わる。社内で完結するオペレーションもあれば、社外に向けてのオペレーションもある。

第四の創造するオペレーションでは、事業目的、戦略に応じて、組織再編も考えられる。コストの見直しがある。組織内の知識流、社内外との情報流については、十分な検討が必要である。

第五は改善にあたる。社会に最適化するために行うべきことである。常に社会の状況を観察しながらの最適化である。

真の理想を求めるのは難しい

理想が理想であるとは限らない。理想とできるのは、自らの知識と見聞の範囲からの延長上ではない。一つの理想を見いだせたとして、それに向かい始めたとき、さらに別の理想が見えるかもしれない。

人は、自らの範囲で理想を描く。立場と状況によって、様々な理想の描き方がある。

- ・マニュアルに書かれている通り実行できるのが理想である。
 - ・見えている障壁を超えることを理想とする。
 - ・理想は、実行できている事柄の向こうにあるとするが、姿はない。
 - ・仮説理論ができていなければそれを理想とする。 などなど
- 現実離れしたものを理想としているかもしれない。現実離れかどうかとも知識と経験の範囲による。

経営計画自体が理想に向けての設計である。自部署の年度設計、MBO作成も理想を元に行っている。

自らの理想形を描いてみましょう。年に一度ずつ描いてみると、変化が分かるようになります。